

～学びと育ちの連続性～

## 浦幌小中一貫便り

平成 26 年 1 月 31 日 (NO.12)



浦幌町教育委員会  
浦幌町教育研究所

# 全道連携協議会 ジョイントプロジェクト

■1月27日(月)、札幌市において道教委主催の「小・中学校ジョイントプロジェクト全道連携協議会」が開かれ、道内の17推進地域42校の研究発表が行われました。過去3年間の研究の集大成とあって、会場は小中連携(一貫)教育に熱心に取り組む教育関係者で熱気に溢れていました。

浦幌町からは、森雅仁教育研究所長と久門教育長が出席し、ポスターセッション形式(17箇所)の発表会や西川教授の講演を聞いてきました。そのうちの一部を紹介します。

## 事例 1・広尾町立豊似中学校

① 学力・学習状況調査の結果分析に基づき、特に落ち込んでいる領域(国語「書くこと」、算数数学「平面図形」)に絞り込み、全町あげて改善策に取り組んだ。② 9年間を見通した系統表を作成して相互の関連を明確にし、「ふり返し学習」「繰り返し学習」「家庭学習」を徹底した。③ 町研などで積極的に「乗り入れ授業」を公開した。

## 事例 2・北広島市立大曲中学校

① 基礎・基本の定着や学習習慣の確立に向け、9年間を見通した指導計画の作成、生活リズムチェックシートの開発活用に取り組んだ。特に算数数学のつなぎを意識した「Joint30」を作成した。② 巡回指導教諭を効果的に活用し、中1ギャップの解消に向けて「乗り入れ授業」や「児童会生徒会役員交流」、「出前コンサート」の実施に努めた。

## 講演「小中連携(一貫)教育の意義と可能性」 京都産業大学西川信廣教授



■小中一貫教育は、教師の資質向上のための取組であり、わかる授業を実現し子どもが授業に向き合い結果として学力が向上する取組である。小中学校の教職員が助け合い、支え合うネットワークづくりが、学校が地域から信頼される条件である。北海道では、小中連携→小中一貫→コミュニティ・スクールという3段階発展論でとらえるのが妥当。

■先進地域の取組(市民科や9年生の卒業論文作成の品川区立日野学園、校務分掌の小中共通化を図った三鷹市の学園構想、6年生から通う京都市立御池おひけ中学校の実践など)から多くのことを学ぶ。

■「15歳の子どもにどのような力を付けるか」というキャリア教育の視点は、小中一貫教育を進める上で重要である。学力向上は教科の点数を上げるだけでなく、「生きる力」を身に付けさせることにある。9年生になったら、自ら設定した課題に向かって探究し、卒業論文を書いて発表できるような子どもを育ててほしい。

なお、西川信廣・牛瀧文宏共著「小中一貫(連携)教育の理論と方法」が、ナカニシヤ出版から発売されました。教育長室の書棚にありますので、自由にご覧ください。